

栽培漁業推進

内田 廉・小川満也

目 的

栽培漁業の推進を図るため、放流対象種のヒラメ、イサキ、クエ及びアワビ類について放流魚・放流貝の混獲状況を把握し、放流効果を検討する。

方 法

1. 放流種苗調査

2021年5～9月にヒラメ、イサキ及びクエの放流種苗を70%エタノールで固定し、イサキ及びクエは鼻孔隔皮の欠損、ヒラメは無眼側の体色異常を標識として、2021年に放流した種苗の有標識率を調査した。

2. 標識放流

和歌山県南部栽培漁業センターが生産した串本町地先放流分のクエ種苗について、2021年9月に魚調理用骨抜きを用いて全個体の左腹鰭を抜去し、標識を施した。また、腹鰭抜去処理を施した種苗約100尾を水産試験場に持ち帰り、1kL円形水槽で飼育し、腹鰭の再生率を調査した。

3. 漁獲物の標識魚混獲率調査

ヒラメは、2020年9月～2021年8月に湯浅湾漁業協同組合（以下、漁業協同組合は「漁協」と略記する）本所、比井崎漁協及び紀州日高漁協南部町支所に水揚げされた漁獲物（活魚）に占める標識魚（無眼側体色異常魚）の割合を標識装着率（2020年9月～10月水揚げ分は過去3年（2017～2019年）、2020年11月～2021年2月水揚げ分は過去2年（2018年、2019年）、2021年2月～8月水揚げ分は過去3年（2018年～2020年）の放流魚の無眼側体色異常率の平均）で補正したものを、それぞれ2020漁期における混獲率として算出した。

イサキは、2020年6月～2021年5月に和歌山南漁協本所に水揚げされた漁獲物を不定期に買い上げ、標識魚（鼻孔隔皮欠損魚）の割合を年齢別に標識装着率（各年の放流魚の鼻孔隔皮欠損率）で補正したものを、2020漁期の混獲率として算出した。

クエは、2021年3月～12月の期間中計10回、和歌山東漁協本所に水揚げされた漁獲物（活魚）に占める標識魚（鼻孔隔皮欠損魚）の割合を調査し、2021年の混獲率として算出した。

アワビ類は、2021年5月31日に和歌山東漁協下田原支所に水揚げされたメガイアワビを買い上げ、漁獲物に占める標識個体（グリーンマーク）の割合を調査し、2021年度の混獲率として算出した。

結果及び考察

1. 放流種苗調査

ヒラメの無眼側体色異常率は、和歌山市放流群（平均全長88.9mm、調査数104尾）で45.2%、海南市放流群（平均全長72.6mm、調査数100尾）で12.0%、有田市・湯浅町・広川町放流群（平均全長92.3mm、調査数101尾）で44.6%、由良町放流群（平均全長83.7mm、調査数120尾）で46.7%、みなべ町放流群（平均全長89.8mm、調査数88尾）で25.0%であった。イサキの鼻孔隔皮欠損率は、御坊市放流群（平均全長73.0mm、調査数120尾）で32.5%であった。クエの鼻孔隔皮欠損率は、串本町放流群（平均全長107.0mm、調査数100尾）で96.0%であった。なお、標識に利用している鼻孔隔皮欠損や体色異常は、生物餌料の栄養条件や飼育水温条件等により生じると推察されており¹⁻²⁾、それらの発生率は種苗生産期の飼育条件の差異により変動すると考えられる。

2. 標識放流

腹鰭を抜去したクエ種苗数は5,890尾（平均全長107.0mm）で、串本町によりすべて串本町地先に放流された。

また、腹鰭の再生率は1.0%（有標識率99.0%）であった。

3. 漁獲物の標識魚混獲率調査

2001 漁期以降の湯浅湾漁協本所、比井崎漁協及び紀州日高漁協南部町支所におけるヒラメ放流魚の混獲率の経年推移を図1に示した。2020 漁期における放流魚混獲率は、湯浅湾漁協本所（調査数 577 尾）で9.0%，比井崎漁協（調査数 854 尾）で10.1%，紀州日高漁協南部町支所（調査数 8,128 尾）で2.4%であった。

2002 漁期以降の和歌山南漁協本所におけるイサキ放流魚の混獲率の経年推移を図2に示した。2020 漁期の放流魚混獲率（調査数 897 尾）は1.1%であった。

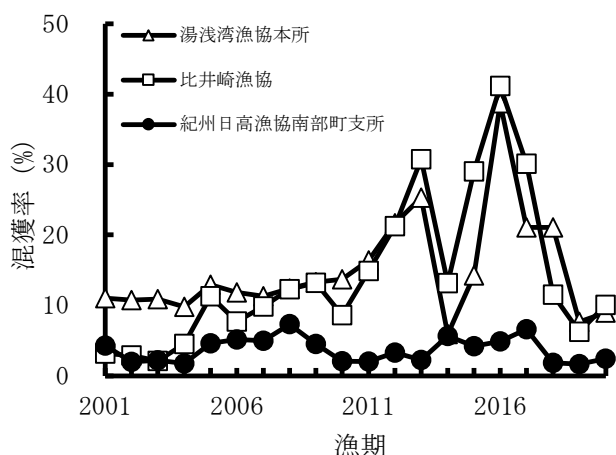


図1 湯浅湾漁協本所、比井崎漁協及び紀州日高漁協南部町支所におけるヒラメ放流魚の混獲率の経年推移

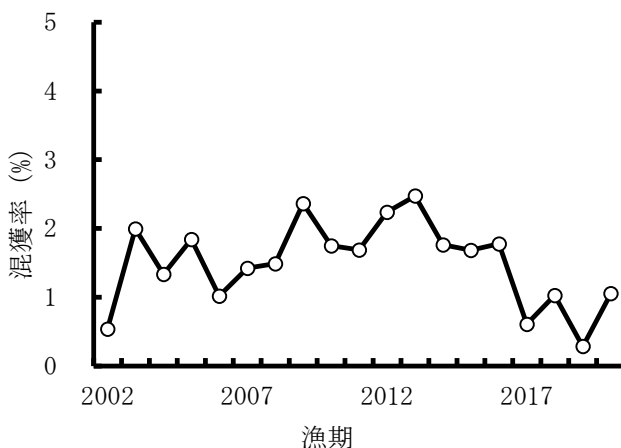


図2 和歌山南漁協本所におけるイサキ放流魚の混獲率の経年推移

2016 年以降の和歌山東漁協本所におけるクエ放流魚の混獲率の経年推移を図3に示した。2021 年は調査した20尾のうち2尾に鼻孔隔皮欠損が認められ、放流魚混獲率は10.0%であった。

1994 年度以降の和歌山東漁協下田原支所におけるメガイアワビ放流貝の混獲率の経年推移を図4に示した。2021 年度の混獲率（調査数 96 個）は58.3%であった。1999 年度以降の和歌山東漁協下田原支所に水揚げされるメガイアワビは30～70%が放流貝であり、放流貝への依存度が高い状態が続いている。

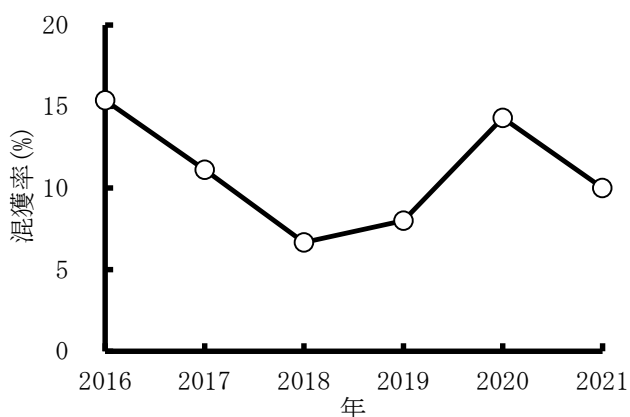


図3 和歌山東漁協本所におけるクエ放流魚の混獲率の経年推移

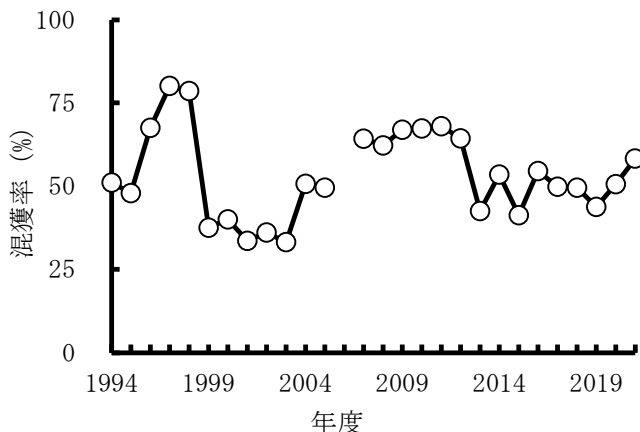


図4 和歌山東漁協下田原支所におけるメガイアワビ放流貝の混獲率の経年推移

文 献

- 1) 松岡正信（2004）カンパチ，イサキ，キジハタおよびヒラメにおける鼻孔隔皮欠損の出現状況（資料）．水産増殖，**52**，307-311.
- 2) 独立行政法人水産総合研究センター（2004）栽培漁業技術シリーズ No. 10 ヒラメの無眼側体色異常個体の出現要因と防除技術，東京．